

## II. 学びの森の風景

### 学びの森の住人たち(11)

—学校でもない学習塾でもない、  
〈学びの森〉という世界が投げかけるもの—

アウラ学びの森 北村真也



#### コミュニケーション・コンプレックス

「コミュニケーションに対してものすごくコンプレックスってない？」

「うん、今でもそうやけど。ずっとそれはネックになっている」

「でも勉強もわからへんかったやろ、その小学校5年生でいきなりポンって学校行って…」

「いや、もう全然わからへん」

「何もわからなかった？」

「うん。それで、それも高学年になればなるほど余計上積みされてわからなくなっていく。学校へ行くのが嫌っていうのとプラスして勉強もできひんということが積み重なって余計行きたくなくなって…」

「そうか…学校へ行っても、しゃべるのは恐ろしく緊張するわ、勉強は授業で何をやっているのかわからないわ…、それは苦痛で仕方ないわけや？」

「しゃべりたいって気持ちもあるけど、どうやってしゃべったらいいのかわからなかった」

不登校の子どもたちにとって、学習の遅れもまた深刻です。学校へ戻ろうとしても、授業でやっていることが全く理解できないわけですから、参加しようもない。ヒロシの場合は、コミュニケーションのコンプレックスに加えて学力の問題があったわけです。

「それで中学生活は？」

「うん」

「中学になって、もう中学は最初から行ってないわけや？」

「中学校もでも最初の頃は、自分の中で気持ちをまたリセットして、新しく始めようと、がんばろうかなと思って、ほんまの最初の頃は行ってたけど、やっぱり勉強とかあるし、学校の行事とかもなかなか…あんまり積極的になれへんっていうか、上手いことやっていけへんところがあって」

「またすぐに行けないようになるわけ？」

「うん、夏くらいで」

「じゃあ一学期くらいは行ってたんや？」

「多分。行っていたと思うんやけど…」

「で、それからまた同じ生活？」

「また二学期くらいから」

「食べて寝て…。家族との会話はけっこうあったの？」

「いや…家族って言ってもおかんと姉ちゃんくらい」

「そやなあ…お父さんは、まったくやったなあ」

「父親はもう…、物心つく前から家庭内が崩壊していたから。母親と父親はしゃべらないような状態で。それ見ていたから、もうなんかしゃべらないのが普通っていう、そういうような状態で…」

「ヒロシがここに来てしばらく経った時、初めて“うちの家おかしいっていうことを気が付いた”っていつか聞いた時のことを思い出した。だからヒロシからしたら、父親と母親はもともとしゃべらないものなんや、と思っていた」

「まあしゃべらないものっていうか、嫌がっているっていうか、嫌がっているっていうのはわかってはいたけど、うちの家では、それが当たり前やったから…」

「その後ヒロシは、中2のいつぐらいにアウラに来たんかな？…やっぱり夏くらいかな？」

「うん…冬前くらい…多分その頃、進路どうする、みたいなことがあって…」

「あ、そうだったっけ？」

「だって3年になったらどうなんのやろ、みたいな流れになってきて…」

「それは、サトルも一緒やった。サトルも中学3年の夏に来るんやけど、夏に来た時に、中学までは入れるけど、この先何もないわけやん。これから先、どうしよう、みたいな。だからそういう不安があったんや。それで、アウラの話はどうやって知ったんだっけ？」

「…なんでやろ？新聞かなんかやと思う」

「お母さんが見つけたの？」

「おかんが」

「それでまあ、ヒロシは私の前にやって来て…いろいろ話をするわけや？」

「うん」

「その初めてヒロシがやって来た時の記憶が、私にはないんや。ヒロシある？私と初めて会ったときってどんな感じやった？」

「この部屋でしゃべっていたことしか覚えてへん」

「この部屋で？」

「ここの部屋で」

「うん、緊張して…。その時が多分一番太っていて髪の毛長くて、ダボダボのジーンズはいて…」

「そやそや。ダボダボのジーンズはいて、髪の毛は全然散髪行ってへん、みたいな。でな、お母さんもすごくしゃべるのが苦手な人やった？」

「お母さんも、そんな得意な方ではない」

「そうやろ、そんな記憶がある」

「おとなしい方っていうか、まあそんな感じ」

「それで、アウラに来てみようと思ったわけや？」

「うーん。まあ、自分の中でどうにか現状を変えないと、っていう思いはあって…」

「で、ここに来て、多分小学校のことからやっていった気がする。違ったかな？」

「うん、多分そう。割り算くらいから多分やっていた」

「だから多分小3とか。そんなところからやったような気がするんやけどなあ」

「必要最低限のだけの教科にしぼって、多分算数とか国語とかをやった」

「なんか、そんなだったような気がするわ。でも、それけっこう大量にやったんじゃない？」

「まあ、やっていたと思う」

「プリントみたいなものを」

「うん。最初は週3日くらいで通っていたけど、こんなペースじゃあかんって行って…」

「間に合わんと思って…」

「うん。で、なんか毎日来るようになって…」

ヒロシの学習は、小3の内容からスタートしました。一旦学び損なったことは、学び直せばいいだけです。とにかく丁寧に一つ一つ積み上げていくのです。そしてその学んだ軌跡が自信として還元されるのです。大事なことは、「ぼくにもできるんだ」という自信。それだけです。

「その時、サトルだけがいた？」

「たしか、うん、そう。あとは高校の浪人生が二人…」

「ということは、不登校として来ていたのは、ヒロシと、サトルの2名だった…」

「うん」

「だから当時は、みんなここに塾として通っていたから、始まりは午後2時からになっていたような気がする。まあ少なくとも昼から…。だけどヒロシが、さっきの話じゃないけど、“太陽の光を見たら眩しくて、もう頭クラクラする”というようなことを言い始めたり、週末にはまた夜型に戻って来れなくなったり、とか言うことが続いて、何かそんなこともあって、絶対アウラも朝から開かないといけないっていうことになったんじゃないかな？」

「そうそう」

「それから本格的にフリースクールがスタートすることになっていったと思う」

「ヒロシのことがあったし、私は朝からアウラを開けなあかんって思ったような気がする。でもその決断には、大変勇気がいった。どうしてかと言うと、アウラ自体が終わるのが午後10時、みんな帰るのは10時半くらいや」

「うん」

「ヒロシの勤めている会社でもこんなに長いこと開いてへんやろ？」

「ない」

「それこそ12時間以上開いているわけや、アウラは…」

「しんどい？」

「まあな、でも必要としてくれる子ど

もがいるやんか。でも実際、ヒロシが来たことが大きかったような気がする。この子をどうにかしないとあかんと思ったことがきっかけやった」

「ぼくのおかげやな」

「ほんと、そう思う。サトルとヒロシがいなかったら、アウラに不登校の子どもたちが集まることはなかったと思う」

アウラの森が不登校の子どもたちを受け入れるようになったのは、本当に偶然からでした。初めて出会った生徒がサトルで、ヒロシは2番目の不登校の子どもです。そしてこのヒロシがたまたま昼夜逆転の生活を送っていたことで、アウラの森は朝から開くようになっていったのです。

ここに大事なポイントがあります。つまりアウラの成り立ちは、常に私たちと子どもたちの共同的なかかわりの中にあるということです。完全な予定調和の中にあるわけじゃない。たとえば通常の学校は、子どもたちがそこに参加する前から、いろいろなことが決められている。だから彼らはその決められていることに合わさなくてはならない。そうすると受身にならざるを得ないのです。アウラの森では、子どもたちは常にその当事者なのです。それは私たちとのやり取りの中に存在し、アウラそのものが、このやり取りの中でどんどん更新されていくのです。つまり私たちと子どもたちとのやり取りが、アウラの森を表現しているのです。

「あとヒロシは、最初から自転車であ

てたんだっけ？」

「最初は どうしていたかな？…覚えてない」

「お母さんに送ってもらってたんかな？」

「ほんまの最初の内は車で多分、来ていたけど。毎日来るようになってから自転車で行く、っていつて」

「…あれはあれで大きかったよね？」

「うん」

「みるみるヒロシ体がしまっていく…」

「ははは」

「それから、ぼさぼさだった髪を突然スパッと切って…。あれなんで髪の手切ったんだっけ？私が切れって言ったんだっけ？」

「いや、覚えてない。たまたまやと思う」

「なんかだんだんシャープに、かっこよくなっていったような感じがしたけど」

「うっとうしかったから切っただけやと思うけど…」

「それからヒロシは、どっかの段階で夜の塾も来るようになったんだよね？」

「うん」

「だから朝から来て、最後の夜10時まで…」

「中1の子と一緒にゼミもしていたから…」

「そうか、わかった。要するに、中学2年の終わりくらいにヒロシが来た段階で、小学校3年からの再学習をしようということになったので、中学3年

ぐらいが終わる頃にヒロシは中 1 くらいのところをやっていたわけや」

「そう。このままだと、さすがにちょっと厳しいんじゃないか、っていう話で、もうちょっとしっかり学力つけて、みたいな感じで…」

「そうかそうか」

「とりあえず 1 年浪人して…って感じで」

「それでちゃんと中学 3 年のところまでは一応学びきったんや、ヒロシは…」

「一通り、ある程度は…」

「やりきったんだよなあ。それでその時に、いろいろ中学生との交流がけっこうあって、みんなから“ヒロシ君、ヒロシ君”とか言われるようになって…」

「まあ、ほとんどゼミの子。中 1 と中 2 の子と」

「なんかそんな感じで一躍人間関係が広がっていったような気がする」

学習ということを通して少しずつ自信をつけ始めたヒロシは、対人関係においてもコミュニケーションの機会を増やしていきました。「学び」と「コミュニケーション」とは、まるで両輪のように機能しながらヒロシ自身を変容に向かわせていきました。

「ところでヒロシにとってアウラってどんな存在だったの？」

「いやあ、どうなんやろ…？でも、ほかの人が学校行くような感じでこっちも行ってたようなところはあると思うけど。多分、学校よりかはもうちょっとフランクな感じで来ていたと思う。

もうちょっと自由がきいて気楽に行けるような感じがあった」

「まあその…ずっと家にいた時は、“学校へ行こう”って、“このままではあかん、出て行かなあかん”って思いながら、行くところがなかった」

「うん」

「行ったとしても勉強もついていけない」

「うん」

「なんか学校にしばらく。そういうヒロシにとっては、アウラはまあ非常にありがたい場やったわけや、きっと」

「ちょうど自分の形に合った、というか…」

「そうやな」

「自分のペースでできるところやったから…」

「ここには、わりと小さい集団があっ…」

「うん」

「まあ私とか、亀谷先生がいたよな？」

「そう」

「まあ、ある意味で、もう一人のおかんみたいな存在やんな？」

「おかんまでじゃないけど…まあでも、うん」

「そうか…それから後になってヨウスケとか、いろんなやつが来たり…その中で、まあヒロシ自身がその…コミュニケーションのコンプレックスを乗り越えていく」

「うん」

「コミュニケーションって何のためにおこなうのかって言ったら、例えば自分っていうものを相手に理解してもら

いたいとか、あるいは受け入れてもらいたいとか、相手を理解したいとかっていう、多分そういうことやと思う。それで、ひょっとしたらヒロシにとっては、ここアウラの存在っていうのは、家族以外に自分を理解してくれる…なんかそういう場、になっていったんじゃないかな？」

「うん、まあ…家以外にいれる場所、っていうか。行ける目的のある場所、っていうか…」

「なんかな、ものすごくそんな感じがするんや。これは別にヒロシに限ったことではないんやけど、理解してもらえる場所なので、なんか自分を出してもいいって思える」

「うん」

「で、理解されない場所で自分出すのって、めちゃくちゃ勇気いるんや」

「うん」

「要するに、変な話、ここやったら裸になっても攻撃されない、安心や、っていう感覚や。自分がありのままにいれる…そんな感覚が、それが多分ここアウラにいる間に、ある程度ヒロシの中に培われていったんやと思う」

「コミュニケーション」という課題に対してヒロシは、取り立てて何かの訓練をおこなったわけではありません。まずはアウラの森の先生たちとの関係ができ、次は同じ不登校の仲間たち、そして塾に通う不登校じゃない中学生たちと、そのコミュニケーションは段階的に発展していきます。ここで大事なことは、コミュニケーションが、ヒロシの行動の目的になっていないこ

とです。彼がだんだんアウラの森になじみ、この森の住人になっていく過程で、そのコミュニケーションの幅が広がっていったのです。つまりここでは、コミュニケーションということが集団への参加の手段として用いられているのです。

「そして、その次の年とかにゼミとかが始まっていく」

「ああ」

「大勢の中学生の中にヒロシが入っていくんや」

「うん」

「すごく緊張していたし…」

「そう、だから最初はそうやった。それは、私が提案したような気もする。ゼミに入れと」

「多分そうやった。ゼミの教室に入る時間になったらすごく緊張して、トイレに行きたいって…」

「そうや、そうや！よく覚えているわ。私も思い出してきた。ゼミの前、毎時間ヒロシはトイレに行かないとダメだった」

「とりあえず行きたくないけど、一回トイレ行って落ち着かせて…」

「でもそれが、だんだん受け入れられていくわけやな？ヒロシも居心地よかったんやろ？」

「まあ居心地…うーん、まあまあ、多分。うん」

「だからそれは昼間のフリースクールの部分で、ある程度自分のコミュニケーションに対しての自信みたいなものが培われていって、それがファーストステップやった気がするわけや。それ

がまた同年代の、とか、あるいはもっと人数が多い中でも試されていった」

「うん」

「その中で果たしてどうなんやろう、という不安があって、ヒロシの中ですごい緊張があって。でもまあそれが、どうにかこれもいけるな、という自信になっていった」

「まあ、うん」

「最初の中1のゼミに？」

「うん。あとは中2のゼミにも…」

「うん」

「中1と中2の両方に入っていたわけや？」

「うん」

「っていうことは、その頃にはゼミの内容をヒロシは理解できる状況になんとかになっていたわけ」

「まあみんなよりかは、多分遅れていたとは思うけど、学校行ってない分…」

「そうやな。だからそうやってこれまで学校の授業に参加してなんにもわからなかったことが、「わかるわ」っていう感覚にかわっていったわけや」

「そうそうそう」

「そうや、だからそこら辺は大きかったよね、やっぱりね。その勉強だけじゃなくて。要するにコミュニケーションのコンプレックスみたいなものを、毎週、紐解かなあかんかったわけや、」

「うん、そう…まあゼミは、自分の中では勉強目的っていうよりかは、そういう、形式の中でやけど…人とやりとりができるようなきっかけの場やったから。ゼミの後がちょっと楽しかったかな。1階に降りてきて、冷蔵庫のあ

るところでちょっとしゃべるのが目的で頑張っていた、みたいなのところもあった」

「けっこうしゃべっていたよな？」

「勉強よりかは、そっち目的になっているところもあったかもしれん。あとやっぱりゼミに参加していたので、ある程度授業めいた、形式的なところにもちょっとずつ慣れていったっていうのもあるかもしれん」

「だから、それは次の学校へという大きい集団にヒロシ自身が入っていくときのある程度の準備になっていった。要するに、ヒロシ自身は、本来やらその成長過程の中で学ばないといけなかったことが学ばないまま、なんかずっと来ている。だから、学ばなかったものはもう一回やっぱり一旦もどって…」

「うん」

「もう一回要するに学び直さないといけない。何かそんな風にもものすごく思ったのかもしれない」

「うん」

「だから学習ということもそうやったし、コミュニケーションということもそうやったし、それから…まあ生活習慣とか？」

「うん」

「生活もひどかったんで、最初の頃」

「ははは」

「その生活をどうするのか。それから体力。まあ見かけの問題もあった。いわゆる引きこもりっぽかったわけよ、私からしたら。見た感じ。わかるやろ？」

「わかるわかる」

「でもそうじゃない、なんかさっぱりした、そういうヒロシ。で、太っていたから、ダボダボの服しか買えなかったし、おしゃれもなかったわけよ、多分、その頃は。違う？」

「まあ」

「だいたい外へ出ることがないから、違う？」

「ない」

「そうやろ？服なんかどうでもよかったわけよ、言ったら」

「うん、ほとんどそんな感じやった」

「そうやろ？そこら辺も変わってきた。そんな風なことが、あの頃にあったんやなって思う」

「うん」

家庭という小さな社会の中で本来手に入るはずだったものが、手に入れられなかった時、それに続く学校や地域といった社会の中でうまくやっていけないことはよくあることです。ヒロシの場合もそうなのかもしれません。

だから私たちは、そのかつて手に入れられなかったものを、もう一度手に入れていく過程を共有するののかもしれません。再学習、あるいは再構築と呼ばれる過程です。ただ子どもたちの中には、手に入れられなかったものを歪な形で手に入れてしまっているものもあります。その場合は、一旦手に入れたものを解きほぐし、新しく学び直すという、脱学習の過程が必要となるわけです。

「それで、さっきヒロシが言った“うちの家ってなんかおかしかったっていうことに初めて気づいた”って記憶。つまり、これまでは“これが自分の家なんや、これが自分の家族、家庭なんや”っていうイメージがあって、その家庭の中にいるから、良いか悪いとかもわからないわけよ。家庭ってこういうものなんやと思い込んでしまう。でもそれが、アウラに来ることで、自分の家族をヒロシ自身が振り返ることができたわけよ」

「うん」

「それで“おかしいやん”ってコトバが飛び出してくるわけ。で、そのあと“うちの家でまともなのは、俺だけや”ってコトバが飛び出してくる。そんなことも覚えているよ。その頃、“お姉ちゃんもなんかわけわからん”とか言って…、お姉ちゃんは保育士かなんかやったんじゃないかな？」

「そう」

「でもなんかそれを辞めて、家でけっこう引きこもっていた時期もあった？」

「まあ引きこもりというか、辞めて…なんにもしてなかった間はあったと思う、確か」

「それから、なんかお父さんも…。お父さんとお母さんは、離婚されたわけじゃないよね？」

「離婚はしてない」

「でも別居されてたっけ？」

「いや、家にずっと一緒に住んでいる」

「でもお父さんお母さんの関係はもう全然成立してない？」

「うん、してない」

「洗濯も別々やったかな？なんかそんな感じじゃなかったっけ？」

「最初のうちは、やっていたけど、もうおかんも嫌になったんかしらんけど、親父の洗濯もやらないようになって、別々に…」

「ごはんも別？」

「ごはんも…作りはするけど、分けて置いてある」

「だからヒロシの中で自分の家族を一旦振り返って、「おかしい」みたいなことを言い始めたことは、ヒロシの家族がどうかっていうことは別にして、ヒロシ自身が新しい目を持つようになったということなんだと思う」

「なるほど」

「今までとは違う目。それは大事なことやなって、ものすごくそう思う。だからそんなことが、高校に行くまでの間にいろいろ起こってきて、私からすればほとんど別人みたいになっていった。「ビフォーアフター」やないけど、ヒロシが中学2年で来たのと、アウラ卒業する時っていうのは、多分ほとんど別人やなっていう状態になったんじゃないかなあと…」

「物心ついた時から両親には会話がなかった」とヒロシは言います。会話のない夫婦なのですが、同じ屋根の下で寝起きを共にして食事もとる。だからこそヒロシにとっては複雑だったのかもしれませんが。ただ意識のレベルでは、それは問題ではありませんでした。なぜなら彼にとってはそれが両親の関係の原型だったからです。お父さ

んとお母さんは話をしないものなのです。

ただそんな不自然な関係をもとに彼が幼稚園に入りやがて小学校へと進学していったときに、コミュニケーションの問題が生じてしまうわけです。どこか歪さを持った人間関係がいろいろな場面で問題というカタチで露呈することになっていったわけです。しかし、当時のヒロシには、それがどうしてなのか理解できませんでした。家の中では、未だに不自然な家族の関係が続いていたからです。

だからヒロシがアウラの森へとやってきた最大の意味は、彼が育った過程を俯瞰的に振り返り、「おかしい」と初めて認識できたことかもしれません。そこを疑い始めることで、ヒロシは再び前に歩きはじめることができたのかもしれません。

